

“道産子自治体”の先進性

竹中英泰

道産子は家意識や男女差別意識が薄く古い因習にとらわれないぶん民主主義になじむのも早いと言えそうだが、こうした道民性は行政レベルや市民活動、自治の在り方にどんな作用をもたらすのだろうか。

開拓使の設置以降、北海道への本格的移住は屯田兵からである。明治三二（一八九九）年までに三七兵村、四万人弱に及ぶ。この間、伊達などの土族移住、十勝の晩成社などの団体の挑戦などもあった。陸別の関寛齋の農場もその一つだ。石狩炭田の開発や第七師団の旭川移転は内陸部の人口増を促した。農林漁業の就業者が増え、道路や鉄道建設が進み、商業などの発展が多くの人々を呼び込んだ。敗戦時の北海道の人口は三〇〇万人に達していた。朝ドラ『なつぞら』に描かれた拓北農兵隊のようなケースもあった。

カネを貯めていつかは内地に帰ろうと思いつながら居ついた人々の多くは、貧しいなかでお互いに助け合って生き残ってきた。多くの道産子家族はこうした歴史を抱えて二代、三代と代を重ねて生まれてきている。北海道はこれらの家族集団を抱えて発展してきた。興味深いのは、維新後の日本社会の近代化に並

行して、ほぼ未開な地に中世封建制社会を経ない独特な地域社会が生まれ、独自に成長してきたことだ。

内地には、中世以来の家父長制があった。親は跡継ぎである長男と同居し長期にわたって権威を及ぼす。土地や主要な財産はすべて長男のもので、他の兄弟姉妹は下位に位置づけられる。垂直性の強い秩序感覚は、強制力無しの規律を生む。ここでの差別は秩序維持機能と裏表の関係にある。

エマニエル・トッドは、識字化や教育の進展度合いと家族類型の相関から世界の多様性を説く。イングランドの核家族では、成人に達する子供たちは親から独立し自由な一人となる。いち早く自由と平等、民主主義を基本におく価値観が生まれたという。日本などの家父長制を軸にする社会には、権威と不平等の階層的秩序を安定させようとする基本的価値観が底流に潜む。中国やロシアに見られる外婚制共同体家族では親子間の強い権威関係を保持する一方で、結婚後も親と同居する兄弟間には平等主義が貫かれる。こうした大規模な家族構造をもつ共同体社会の近代化は、共産主義になじむとの指摘が注目を浴びた。

トッドにならって日本のケースを見るとどうか。中世以来の内地社会では、世代間の権威関係と兄弟間序列が内部に組み込まれ、縦に統制化され強固な安定性が保持されてきた。戦後民主化を経ても縦型秩序によって統制される色合いはなお強い。これに対して北海道ではどうか。蓄積の浅さからか土地など主要な財産の評価は低く流動的だ。家や土地への執着は弱く定着率も低い。垂直性の秩序感覚が弱い反面、貧しさが故に生まれる互助関係や互助意識は自然発生的に育っている。

内地ほどに家や土地に縛られない女性の強さは、離婚率の高さに反映するとの指摘もある。こうしてみると、道産子の家族集団を多く抱える地域社会には内地とは違う価値観が育まれている。それが直ちに欧米に近いものと断言できるわけでもなくとも、その独自性は考慮に値しよう。ニセコ町まちづくり基本条例や栗山町議会基本条例が全国に先駆けたのは、こうした道民性の反映のひとつではなからうか。

旭川市はこの三月、私立大学の市立化という稀有な動きに向けて足を踏み出した。公立ものづくり大学を設立しよう」という一〇年に及ぶ市民活動は、旭川大学の市立化に路線は変更されているが、この間、旭川大学はもろろん関係する市民、議会、そして行政がオープンな場で粘り強く議論を重ねてきた。地域ぐるみの熟議が、新たな大学に何を付加するか注目だ。

へたけなか ひでやす・旭川大学名誉教授

旭川ウェルビーイング・コンソーシアム理事